

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

第14回 全国大会プログラム

日時： 2014年11月8日(土) 10:00～18:00

場所： 上智大学四谷キャンパス12号館

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

(JR中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線/四ッ谷駅 麴町口・赤坂口から徒歩5分)

★研究発表 (10:00～12:25)

第一室 (12-201室)

司会 筑波大学 山口 恵里子

1. ヴィクトリア朝絵画における「つれなき美女」のイメージ——ウォーターハウス《つれなき美女》をめぐって (10:00～10:45)

上智大学(特別研究員) 若名 咲香

2. ワイルド詩と印象派絵画 (10:50～11:35)

和歌山大学 桐山 恵子

第二室 (12-202室)

司会 日本女子大学 川端 康雄

1. 煙突掃除の少年と Climbing Boy (10:00～10:45)

日本女子大学(院) 清水 友理

2. イギリス「作家協会」設立とその文化的意義 (10:50～11:35)

広島経済大学 麻島 徳子

3. 紳士の国のコピー文化——ヴィクトリア朝初期のデザイン奨励政策 (11:40～12:25)

福岡大学(非) 松隈 達也

★シンポジウム (12-102室、13:45～16:30)

破壊と創造——第一次世界大戦とイギリス作家たち

司会・パネリスト 慶應義塾大学 河内 恵子

パネリスト 成蹊大学 遠藤 不比人

津田塾大学 秦 邦生

一橋大学 中井 亜佐子

★ラウンドテーブル (12-202室、13:45～16:30)

少女マンガとネオ・ヴィクトリアニズム——『バジル氏の優雅な生活』から『黒執事』まで

提題者：フリーライター 村上 リコ

日本女子大学 川端 有子

★特別講演 (12-102室、16:40～17:40)

E. M. フォスター『モーリス』と緑林——イングリッシュネスと同性愛

司会 甲南大学 井野瀬 久美恵

法政大学 丹治 愛

★総会 (12-102室、17:45～18:00)

司会 福島大学 辻 みどり

★懇親会 (18:10～20:00)

会場 紀尾井坂ビル会議室4

司会 駒澤大学 川崎 明子

【研究発表】

ヴィクトリア朝絵画における「つれなき美女」のイメージ——ウォーターハウス《つれなき美女》をめぐって

上智大学（特別研究員）若名咲香

ヴィクトリア朝後期に活躍した画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス (John William Waterhouse, 1849 - 1917) は、1893年に《つれなき美女》(*La Belle Dame sans Merci*, 1893) と題された絵画を発表した。この作品は、ジョン・キーツ (John Keats, 1795 - 1821) の同名の詩「つれなき美女」(*“La Belle Dame sans Merci,”* 1819) に基づくものである。この詩はヴィクトリア朝絵画において、いわゆる「ファム・ファタル」像の典型例として重要な主題の一つであり、多くの画家たちによって繰り返し絵画化された。中でもウォーターハウス作品は原典の詩から逸脱した描写があり、独自性の強い作品であると考えられる。この前提に基づき、本発表ではまず、キーツの「つれなき美女」の主題がどのように絵画化されたのかを概観する。さらに「つれなき美女」の図像がヴィクトリア朝においてどのような意味を担っていたのかを分析し、ウォーターハウス作品に対する解釈を試みたい。その過程で、騎士や美女のモチーフに込められた意味の多義性が明らかになるだろう。

ワイルド詩と印象派絵画

和歌山大学 桐山恵子

オスカー・ワイルドの『詩集』(1881)は先達詩人たちの二番煎じとして軽んじられ、小説や戯曲などと比べると本格的に論じられることは少ない。そこで本発表では、ワイルドの詩を同時代の絵画と比較することにより低評価に甘んじてきた彼の詩の近代性を発見してみたい。これまでも「シンフォニー」や「ノクターン」など作品のタイトルとして音楽用語が使用されている共通点から、ワイルド詩とホイットラー絵画との関連が指摘されることはあった。しかし今回はそこからさらに踏み込んでフランス印象派絵画との比較を行う。とくに“*Impression du Matin*”、“*Symphony in Yellow*”、“*Fantaisies Décoratives*”などワイルド詩における色を示す単語の使用に注目し、モネやシスレーなど印象派画家が生み出した筆触分割あるいはスーラによる点描手法との関連性を探り、ワイルドが詩において実現しようとした「絵画」とはどのようなものだったのかを追及する。

煙突掃除の少年と Climbing Boy

日本女子大学（院）清水友理

産業革命後のイギリスにおける悲惨な児童労働の典型として認知されている「煙突掃除の少年」は、文学などにおいても児童の労働や格差といった社会問題を提示する主要なシンボルである。例えば、キリスト教社会主義者の作家チャールズ・キングズリーは、1863年に煙突掃除の少年トムを主人公にした作品『水の子』を発表し、労働者階級の子どもの現状を訴えた。だが、実際のところ煙突掃除という職種は当時からマイナーなものにすぎず、児童労働研究においても重要なものではなかった。それにもかかわらず煙突掃除の少年が独自の地位を獲得した理由の一つは、彼らに対する保護運動の黎明期に登場した“Climbing Boy”(クライミングボーイ)という言葉にあった。本報告では、この“Climbing Boy”の言葉に着目して、「煙突掃除の少年」という強いインパクトを持つ表象とその形成について検討を試みたい。

イギリス「作家協会」設立とその文化的意義

広島経済大学 麻島徳子

イギリスの「作家協会」(*The Incorporated Society of Authors, Playwrights and Composers*)は、作家の著作権その他を保護する目的で、1884年にウォルター・ベザントによって設立され、時代を代表する小説家らが次々に加入した。その事実、後期ヴィクトリア朝の出版業界が急速に商業化していくなかで、出版メディアの変貌が作品の質に及ぼす影響を、小説家らが懸念した結果だと捉えることができる。市場原理が支配し始めた出版業界を背景として、設立者ベザントや協会の方針に賛同した当時の小説家らは、イギリス小説の前途をどのように危惧していたのか。本発表では、ベザントによる講演“*The Art of Fiction*”(April 1884)と、それへの反論としてのヘンリー・ジェームズによる同名のエッセイでの議論を起点とする。そして、ベザントの協会活動理念を1890年から発行された協会機関誌“*The Author*”の記事に辿りながら、イギリス小説史における「作家協会」設立の文化的意義とは何であったのかを考察したい。

紳士の国のコピー文化——ヴィクトリア朝初期のデザイン奨励政策

福岡大学（非）松隈達也

1841年、あるキャリコ捺染業者が一通の書簡を送った。宛先は保守党党首ロバート・ピール卿。書簡を受け取ったピール卿の目に飛び込んできたのは、切実な訴えであった。「オリジナル・デザインの価値を守ってほしい。著作権の保護期間を延長してほしい」と。

ヴィクトリア朝時代のイギリスでは、製造業での技術革新や工業化が進展した反面、工業デザインの質や芸術性が低下したと問題視された。菅靖子氏の言葉を借りると、イギリスは自国産業が発展すればするほど、「大陸諸国とのデザインの質あるいは芸術性の差に悩む、いわばデザイン・コンプレックスを抱えて」いたのである。本報告では、「デザイン・コンプレックス」に直面した一人のキャリコ捺染業者に注目する。彼——ジェームス・トムソンは、ランカシャー州クリザロウに拠点を構えた捺染業者で、幅広い人脈を頼りに知的財産の保護、デザイン登録制度、デザイン学校設立などの運動に尽力した人物であった。

【シンポジウム】

破壊と創造——第一次世界大戦とイギリス作家たち

「中間地帯（ノーマンズランド）を生きる女たち」

慶應義塾大学 河内恵子

『『育児室の戦争』——心理学化される戦争、あるいはイギリスの精神分析』

成蹊大学 遠藤不比人

「前衛芸術と『見えない』戦争——ウィンダム・ルイスの場合」

津田塾大学 秦 邦生

「世界大戦とモダニズムの『晩年』」

一橋大学 中井亜佐子

第一次世界大戦という巨大なエネルギーは、さまざまなかたちで表現されてきた。19世紀後半に出現した、自立と男性との平等の権利を求めた「新しい女」たちの運動に則して、戦争を「女性の解放」ととらえる方法がある。モダニズムの発展の時期と重なることから「戦争と新しい表現方法」というスタンスで考察することも可能だ。19世紀末から多くの人たちの心を暗く支配した退化論——これは世紀転換期のすぐれたゴシックフィクションを生み出すひとつの源泉なのだが——と結びつけて「戦争のゴシック性」を語る手段もある。戦争勃発から100年を経た今、このGreat Warを把握しようとする試みはますます増加し、その方法は複雑化している。今回のシンポジウムでは、パネリストは第一次世界大戦時を生きた作家たちに注目し、彼ら、彼女らを軸に、戦争の破壊と創造を考察するという、きわめてシンプルな方法をとった。各パネリストの考察方法と戦争観はさまざまだが、異なる論の交点にはイギリス文学における表象としての第一次世界大戦がみえてくるはずだ。

【ラウンドテーブル】

少女マンガとネオ・ヴィクトリアニズム——『バジル氏の優雅な生活』から『黒執事』まで

提題者：フリーライター 村上リコ

日本女子大学教授 川端有子

今、世界中で一番人気があるMANGAは、枢やな作『黒執事』（現在19巻）であるという。これは、伯爵家の十三歳の当主シエルと、彼と契約を結んで仕えることとなった悪魔の執事の活躍を描くシリーズで、アニメやミュージカル、実写映画にもなっている。

この作品は、ヴィクトリア朝のイギリスが舞台となっているのが大きな特徴であるが、これ以前にも、ヴィクトリア朝のものには、森薫の『エマ』など多くの先行作品があった。これらが、おそらくは背景が非常に丹念に調査された史実であることを知らない日本の中・高校生にも広く受け入れられ、さらにまた翻訳を通じて、フランスやドイツでも大人気であるというのが興味深い。

そこで、今回のラウンドテーブルでは、まず日本の少女マンガの歴史を軽く押さえたうえで、その中の「ヴィクトリア」ものの系譜を示し、それぞれの作品が何の影響を受けて、ヴィクトリア朝文化を受容し利用したのかを分析、現代の若い人々のあいだで、ヴィクトリア朝文化というものが、どのように理解されているのか、その一端が明らかになればと考えている。

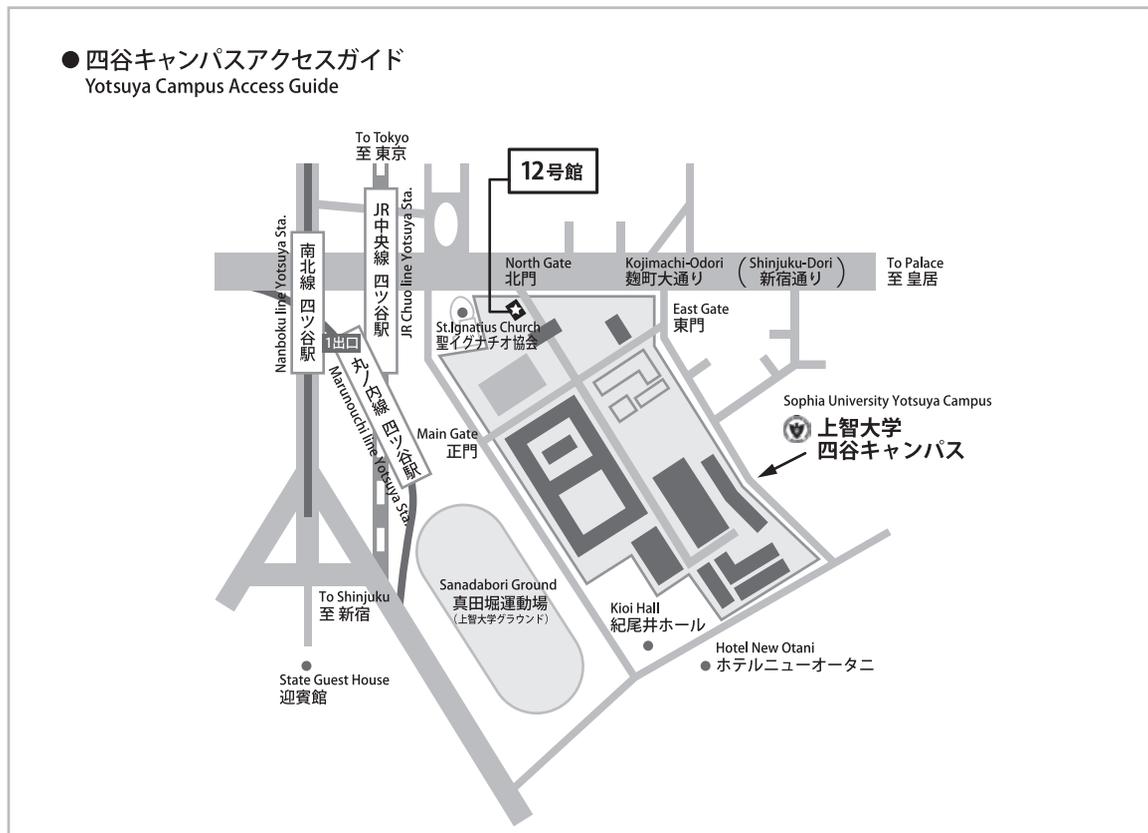
★特別講演

E. M. フォースター『モーリス』と緑林——イングリッシュネスと同性愛

司会 甲南大学 井野 瀬久美 恵
法政大学 丹 治 愛

1913年9月から14年7月にかけて執筆されたフォースター (E. M. Forster) の遺作『モーリス』(Maurice, 1971) は、男性どうしの同性愛的接触が刑罰の対象であった時代に、彼自身同性愛者であった作家によって書かれた同性愛小説である。わたしはこの作品を、同性愛をめぐる後期ヴィクトリア朝の社会的思想的動向との関連において文化研究的に解釈してみたい。とくに、ナショナリズムとともに拡大したミドル・クラスの市民的価値観 (respectability) のなかで同性愛がどのように観念化されていたか、そしてそれと対抗するかたちで同性愛についての新しい観念がどのようなかたちで構築されつつあったかを概観したうえで、フォースターが前作『ハワーズ・エンド』(1910) 以来のイングリッシュネスの主題を、この同性愛小説においてどのように展開しているかを検討したいと考えている。

*会員以外の方の参加も歓迎いたします (無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費をお支払い願います)。



日本ヴィクトリア朝文化研究学会

(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：〒 658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部 井野瀬久美恵研究室

Tel: 078-431-4341/Fax: 078-435-2578

E-mail: victoria @ center.konan-u.ac.jp